

## I. 研究開発3年次の概要

### 1 平成17年度研究開発の概要

斉 藤 真 子

#### 1 研究開発課題

「高大の連携」を生かした「青年期のキャリア形成」に資する教育課程の研究開発

—総合的学習の発展を軸とした併設型中高一貫カリキュラムの開発—

#### 2 研究の概要

大学と連携した併設型「中高一貫カリキュラム」(1-2-2-1制)の実践研究(キャリア形成につながる総合人間科・ソーシャルライフ・選択プロジェクト・新教科群(「心と身体の科学」「自然と科学」(高1)「国際コミュニケーション学」「共生と平和の科学」(高2)など)の成果をふまえて、発展的な「中高一貫カリキュラム」のあり方についての研究開発を行う。また、同一キャンパス内にある総合大学の各研究科と連携し、文理融合の「21世紀型教養」を育むことにつながる、新しい教科・科目構成をはじめとするカリキュラムデザインについて研究し、21世紀の新しい中等教育のあり方を提案する。

#### 3 研究の目的と仮説等

##### (1)研究仮説

少子高齢化と成熟社会を迎えた現代日本の中等教育に必要なものの一つがキャリア教育である。本校の併設型「中高一貫カリキュラム」においては、中等教育におけるキャリア形成の3要素(学び・人や社会とのかかわり・自立)をカリキュラムの中に位置づけて、新教科(「ソーシャルライフ」・「心と身体の科学」「自然と科学」「国際コミュニケーション学」「共生と平和の科学」)を研究開発している。また、大学と連携して、一人ひとりの知的好奇心と個性的自立を育み、社会や人とかかわりの中で生き方を学び合う「中高一貫カリキュラム」の発展上に「21世紀型教養」があると考え研究課題を設定した。

12年度より普通科タイプの併設型中高一貫校として発足した本校は、総合的な学習やキャリア形成を中心に、中等教育の理念と課題についての実践的な研究を重ねてきた。その知的好奇心と創造的・個性的自立を育み、「生き方」を学び合う教育実践の成果をふまえて、発展的な併設型「中高一貫カリキュラム」の研究開発を行う。

「21世紀型教養」は、生きる力と個性的自立を育む「中高一貫カリキュラム」の発展上にある。またその根底に

ある「学びの力」を身につけさせるために、名古屋大学の大学生・院生をTAとして位置づけ、効率的な運用と授業の中での可能性を追究し、新しい授業のあり方についても研究する。

そして同一キャンパスにある総合大学と連携した、文理融合の「21世紀型教養」を育むことにつながる、新しい教科・科目構成をはじめとするカリキュラムデザインについて研究し、21世紀を創る新しい中等教育のあり方について提案する。

これは教育発達科学研究科「中等教育研究センター」の組織を通じて、総合大学である名古屋大学の各研究科やセンターとの共同研究として取り組むものである。

##### (2)教育課程の特例

中学では「生きる力」(人間関係能力を学ぶ「ソーシャルライフ」と基礎学力)の育成のために、210時間が必要である。

#### 4 併設型中高一貫カリキュラムの概要について

##### (1)併設型中高一貫カリキュラムの特徴について

###### ①「1-2-2-1制」の枠組とその発展

「併設型中高一貫カリキュラム」の区分である「1-2-2-1制」は、中等教育段階にある生徒の一人ひとりの個性と自立の発達段階から、中1(入門基礎期)中2・3(個性探求期)高1・2(専門基礎期)高3(個性伸長期)で4区分している。

併設型中高一貫校であるので義務教育である中学校と高等学校とをはっきり区別するからである。「1-2-2-1制」は中等教育段階にある生徒の育ちを中心にすえ「生徒一人ひとりの自立とキャリア意識を形成するための多様な学びを構造化したカリキュラム」である。

知的好奇心と「自ら学ぶ力」とともに、豊かで幅広い学力と人間力を育成する六年一貫カリキュラムである。

平成12年度から新しい併設型「中高一貫カリキュラム」(1-2-2-1制)を実施する際に、それまでの「総合人間科」の学習内容の一部であった「直接人から学ぶ心の教育」の内容を「人間関係構築スキルを教室で学ぶソーシャルライフ」の時間として特設した。

それぞれの授業の違いとねらいを明確にし、より学習効果をあげるためであるし、ソーシャルライフが学校生活と学習活動のベースとなるもので、日頃の学校生活にも役立つものであるからである。

特に生徒一人ひとりが学びの主体である「総合人間科」の学習においては、キャリア形成につながる自立・生き方・多様な学び（の方法）をより幅深く追究できるようになった。

次に専門基礎期にあたる高校1・2年生には、21世紀型の学びの力を育むために4科目からなる「新教科群」の授業を大学教員と協働で開発した。高校3年生の個性伸長期の学びの基礎作りであるとともに大学での専門教養につながるものである。

また、この新教科群の学習内容は大学連携講座の「学びの杜」とつながっていくものである。「学びの杜」講座の発展として「学びの杜（学術コース）」（理・法・教育・心理）を連続講座として高校生に単位化した。従来の「学びの杜」は総合コースとして残し区別した。

専門基礎期（高1・2）に、自分の興味関心のある将来の専門科目の内容をいろいろ学ぶことで、個性伸長期（高3）において現実的な選択ができる力となり、一人ひとりの多様な学びのキャリアにつながっていくからである。

#### 個性を探る

|       |              |     |          |          |
|-------|--------------|-----|----------|----------|
| 入門基礎期 | 中学1年         | 総人科 | ソーシャルライフ |          |
| 個性探求期 | 中学2年<br>中学3年 | 総人科 | ソーシャルライフ | 選択プロジェクト |

#### 個性を伸ばす

|       |              |     |          |      |                 |
|-------|--------------|-----|----------|------|-----------------|
| 専門基礎期 | 高校1年<br>高校2年 | 総人科 | ソーシャルライフ | 新教科群 | 学びの杜(学術コース)連続講座 |
| 個性伸長期 | 高校3年         | 総人科 |          |      | 学びの杜(学術コース)連続講座 |

#### ② 六年一貫のキャリア意識の形成について

総合人間科における三つの学年テーマ（生き方・生命・平和）を中学と高校で繰り返す。中1の総合人間科の「生き方」が高3の「生き方」に発展的につながっていく。総合的な学習の時間「総合人間科」がキャリア意識の形成を育てるカリキュラムの核となる。総合人間科の学習で生徒のだれもが満足感を感じるの自分自身が学びの主体になることである。自分の意志で

課題を決定し学習（行動）することには自己責任を持つ。そしてフィールドワークで計画実行力や情報探索力がつくとともに発表会で友達と学び合う。失敗からも学ぶことで自己肯定感を持つ生徒は多い。

次に、人間関係構築スキルを体験的に学ぶソーシャルライフの授業は中学から高校へと「なんのために生きるのか」と問う時期の生徒の心の発達段階に応じた授業である。自分と他者・集団・社会の関係に気づき、対人関係能力や社会志向性をこの授業を通して身につけることの意義は大きい。

次に「1-2-2-1制」の中2・3の時期の選択の理念を（広く浅く）とし、高1・2の時期の選択の理念を（狭く深く）とした。選択能力を育てるために選択プロジェクト（9教科11科目）と新教科群（4科目）をおいた。

「併設型中高一貫カリキュラム」で開発した新科目と青年期のキャリア形成における三つの要素との関連は以下のようである。

#### 「併設型中高一貫カリキュラム」と青年期のキャリア形成の三つの要素について

##### A人や社会とのかかわり

総合人間科

フィールドワークで校外の専門家に直接会う

ソーシャルライフ

人間関係構築スキルを教室で学ぶ

##### B学 び

総合人間科

探究 調査 発表 話し合い 研究報告書作成  
教科の学習

学びの基礎

選択プロジェクト（中）

選択

新教科群（高）

多角的な視点 知識の統合

学びの杜（学術コース）（高）

大学での研究内容を知る 専門教養

##### C自 立

総合人間科

研究テーマは自分の興味・関心・個性

生き方を学び合う

#### ③ 21世紀型の学びの力である新教科群から学びの杜（学術コース）への発展について

新教科群と学びの杜（学術コース）は、研究専門基礎（教養）としての多角的な思考力を育むことを目標としている。併設型中高一貫カリキュラムの「専門基礎期」にあたり「狭く深く」学ぶ。二年間で四つの科

目を学ぶ。大学教員が授業に加わり多角的な視点から考え判断する力を育てる。21世紀を切り拓いていくのに必要となる学びの力である。そして教科の枠をこえて大学における教養教育につながる専門的な学習である。

|       |                  |              |                 |
|-------|------------------|--------------|-----------------|
| 高校1年生 | 心と身体の科学(前期)      | 自然と科学(後期)    | 学びの杜(学術コース)連続講座 |
| 高校2年生 | 国際コミュニケーション学(前期) | 共生と平和の科学(後期) | 学びの杜(学術コース)連続講座 |

学びの杜(学術コース)連続講座の協力部局  
法学研究科・理学研究科・教育発達科学研究科

また新教科群で扱った内容や多角的な思考力を、学びの杜(学術コース)の各講座の講義内容に発展・関連させることでその相乗効果が生まれる。やがてそれらは教科の学びに直接還流することになる。

価値観が多様化し少子高齢化がすすむ社会の中で、一人ひとりが市民的科学リテラシーを持ち、多様な学びをすることで、自らの将来展望のある生き方をするために必要な学びの力の基礎を形成することができるのである。

中等教育から高等教育への接続には、キャリア形成の三つの要素であるA人や社会とのかかわり、B学びの力、C自立の力、を系統的にカリキュラム化して配置することが必要である。

また中等教育から高等教育への質的な接続を考えると、必修教科(科目)や選択教科(科目)における教育(専門基礎準備教育)に加えて、文理融合で創造的な教育(専門研究準備教育)が必要になる。とくに総合大学と連携した「専門研究準備教育」を高校1年生よりカリキュラム化することが必要である。本校の研究開発でカリキュラム化した「新教科群」(高)や「学びの杜・学術コース」(高)は専門研究準備教育である。

「学びの杜・学術コース」は土曜日や夏休みを活用した10回分の連続講義で高校生対象の大学教員による専門的な講義である。これらの講座では学問の世界を知り、豊かな学びの力を育むことを目的としている。問題発見・解決型の学習の上に専門的な研究につながる学びの力が育つからである。自由で創造的な思考力や多角的な問題認識能力や多面的なアプローチによる推測力などは研究に大切な力である。そして高校段階から多様な学び方を経験することが、大学での学部・学科を自覚的に選択する能力につながるし、大学での専門研究への自立的な取り組み方になるのである。

本校の併設型中高一貫カリキュラムは、「個性の伸

長と開花」と「自分の人生と将来を考える」ために、「文理融合で創造的な教育プログラム」を開発した。生徒ひとり一人が、自分のキャリア形成のために何が必要であるかを「自分のカリキュラム」の柱として考えながら、ゆっくりと位置づけることを可能にするプログラムのことである。

専門研究準備教育(新教科や学びの杜・学術コース)の学びに触発されて、専門基礎準備教育(必修教科(科目)や選択教科(科目))における学習の必要性やその修得の意義が分かるし、それぞれの学び方の持つ意味と理解が深まるのである。

文理融合のねらいは、とりあえず、専門基礎準備教育においては「文」と「理」にわけて専門研究につながる基礎知識を習得しするが、文理融合を目指すことで相乗効果がうまれ幅広い素養を備えた学びの基礎を築くことになる。そして新しいものを作り出すための基礎となる学びが可能となるのである。

#### ④ 編成した教育課程の特徴について

A六年一貫のキャリア形成の中心にある「総合人間科」「選択プロジェクト」「新教科群」「ソーシャルライフ」「学びの杜(学術コース)」などの多様な学び方を通して、自分自身でキャリア意識の形成をする。

#### B新教科群

高校1年生 「心と身体の科学」(前期)

「自然と科学」(後期)

高校2年生 「国際コミュニケーション学」(前期)

「共生と平和の科学」(後期)

併設型中高一貫カリキュラムの「専門基礎期」にあたり「狭く深く」学ぶ。「新教科群」は、既存の教科や総合人間科(総合学習)とをつなぐものである。二年間で四つの科目を学ぶ。融合カリキュラムの位置づけは、そのねらいのひとつにあるように、「既存教科相互の融合」である。各教科ごとの指導では手薄な、または一面的な指導になりがちな学習領域や各教科に分散しがちな学習領域に焦点を当て、既存の教科の学習内容を統合・再編していくことである。ゆえに既存教科の内容を融合して、合科またはクロスカリキュラムで実践することにより、総合学習と教科を新教科群が結ぶことになる。

また、大学教員が授業に加わることで、多角的な視点から考え判断する力を育てるとともに、多様な学び(方)をすることで、教科の枠をこえて大学における教養教育につながる専門的な学習となる。この科目で育てる学力は21世紀を生きるのに必要となる学びの力である。

#### Cソーシャルライフ

担任と副担任(体育科)のT Tによって行われるソーシャルライフの授業は、「教室で人間関係を学ぶ楽しい授業」として定着し、保護者の理解もある。ソーシャルライフは心理学の知見を背景にして一人ひとりの「社会的コンピテンス」を高めるための授業だからである。

業での文理融合の「21世紀型教養」を育む学習方法をとらえる目的を持つものである。

(「協同的探究学習モデル」参照)

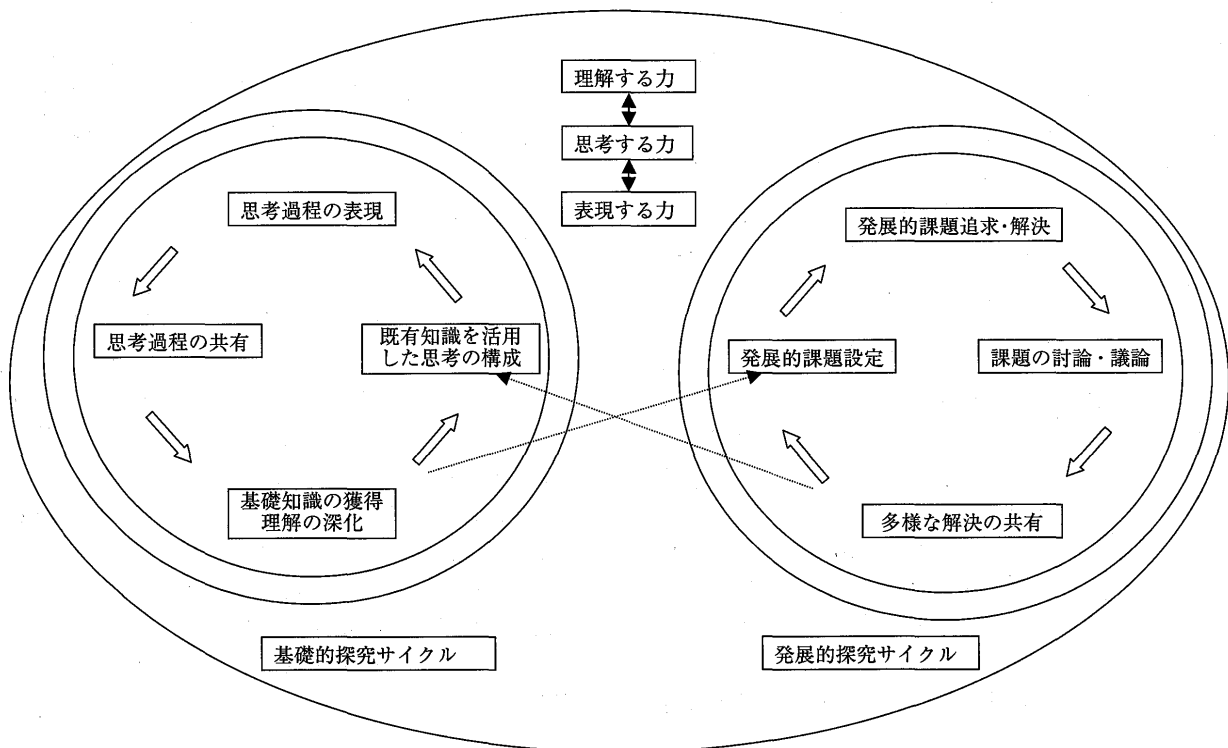
#### D学びの杜(学術コース)(高1～高3の希望者)

理学研究科・法学研究科・教育発達科学研究科(教育学・心理学)の教員が「学びの杜」(学術コース)の連続講座として高校生に講義を行う。受講した生徒の単位として認める。大学での研究につながる専門的知識と教養を得ることができ自分の適性を知ることができる。

#### ⑤ 教育課程の評価について

研究主題である「青年期のキャリア形成」に資する教育課程の総括として青年期のキャリア形成につながる「学びの力」に関するアンケートを6学年に実施した。カリキュラム評価の一貫として「教育プログラム」(総合人間科・ソーシャルライフ・新教科群・学びの杜(学術コース))などの目標とその目標に対する学びの力を設定し、それぞれの学びの力に対応するアンケート項目を作成しアンケートを実施した。「協同的探究学習モデル」は、研究開発で取り組んだ多様な実践授

協同的探究学習モデル



## (2)研究の経過

|                | 実施内容等   |
|----------------|---|
| 第1年次           | <ol style="list-style-type: none"> <li>1 「青年期のキャリア形成」の視点からの「併設型中高一貫カリキュラム」(1-2-2-1制)の実践の総合的な評価と課題の整理</li> <li>2 文理融合の「21世紀型教養」についての意識調査と生徒の実態把握<br/>大学の求める「知」の内容と中・高校生の学力について、その現状を本教育学部とともに調査研究し教育学的見地からの実態把握をする。「21世紀型教養」の基礎として求められている「学力」を「8つの学力」と「2つの基礎力」と定義して、全ての教科・学校行事等に関連させてアンケートを実施した。「8つの学力」とは、「理解する力」「表現する力」「思考する力」「情報や知識をやりとりする力」「自分を知る力」「人や社会と関わる力」「問題を設定する力」「問題を解決する力」とした。また、「2つの基礎力」は、「基礎力1(知識・技能)」「基礎力2(感性・好奇心)」と定義した。</li> <li>3 名古屋大学との連携による新しい「教科のあり方」についての研究<br/>①名古屋大学の各研究科(理・工・環境・医・農・多元数理・法・経・文・教・国際開発など)やセンター(留学生・保体)とともに「新しい教科」の授業展開と成績評価についての検討<br/>②学年課題と年間指導計画案の作成</li> <li>4 併設型中高一貫カリキュラム(1-2-2-1制)を発展させた中等教育と高等教育をつなぐ「中・高・大連携カリキュラム」の作成</li> </ol> |
| 第2年次           | <ol style="list-style-type: none"> <li>1 文理融合の「21世紀型教養」を育む教科や授業の実施と評価<br/>①文理融合の21世紀型教養を育む教科の系統性とその評価<br/>②名古屋大学の研究者、院生、留学生の参加による「新しい教科」の実施<br/>③中・高校生の名古屋大学の授業等への参加と成績評価のあり方<br/>④「学力アンケート」の実施。「8つの学力」と「2つの基礎力」について各教科・総合人間科・新教科・行事等における機能の検討</li> <li>2 「中・高・大連携カリキュラム」の試行と中高大の連携を生かした実践<br/>①TTや少人数教育による一人ひとりの「確かな学びの力」を伸ばす併設型中高一貫カリキュラムにおける教科の編成を考える。<br/>②大学連携講座「学びの杜」の実施による「知的好奇心」の育成(中・高・保護者・地域の方の参加)</li> <li>3 生徒の変容を具体的に把握し成果と問題点を明らかにする。</li> <li>4 多様な学習方法を試みることで指導方法の改善を図る。</li> <li>5 第3年次に向けて研究成果のまとめの作業に着手する。</li> </ol>  |
| 第3年次<br>(当該年次) | <ol style="list-style-type: none"> <li>1 併設型中高一貫校における「中・高・大連携カリキュラム」全般の反省と総括(「学びの総合力(8つの力)」によるアンケート)<br/>①研究内容全般の評価<br/>②生徒からみた「中・高・大連携カリキュラム」の問題点の整理<br/>③研究発表会による研究成果の公表と研究協議を通じての批判・検討</li> <li>2 併設型中高一貫校における新しい中高大連携教育のあり方<br/>①新しい教科・科目構成をはじめとするカリキュラムデザインへの提言<br/>②中高大連携教育のあり方を報告書にまとめる。<br/>③「新教科群」(高1・2)の授業内容を出版する。<br/>④大学との連携連続講座「学びの杜」(学術コース)を単位化する。<br/>理学探究講座・法学探究講座・教育学探究講座・心理学探究講座</li> </ol>   |

## (3)評価に関する取組

|                | 評価方法等   |
|----------------|---|
| 第1年次           | 研究発表会（2004年2月13日 テーマ「ともに学びを創る－中高のキャリア意識の形成と自立的な学びを育てるカリキュラムの開発」）において併設型「中高一貫カリキュラム」の実践的な取り組みの総合的な評価と課題について研究協議をした。そして取り組みの実践内容をまとめた『新しい中等教育へのメッセージ－ともに学びをつくる－』（黎明書房）を出版した。生徒・保護者・教員などへのアンケート調査により、大学と連携した中高一貫カリキュラムを検証した。またシンポジウムや学力調査などにより大学の求める「知」と中・高校生の学力について検討した。本校の学力に關しての評価について、「8つの力」と各教科の学力と対応するように検討を行った。学力アンケートにおいては、「8つの力」と「2つの基礎力」と対応した質問紙を作成して実施した。 |
| 第2年次           | 「併設型中高一貫カリキュラム」の実践研究をもとに、中・高6カ年一貫の「キャリア教育」のあり方についての実践研究をする。ソーシャルライフの授業実践についての『学校教育で育む「豊かな人間関係と社会性」』（明治図書）が出版される。中1～高3の生徒・保護者と教員などへのアンケート調査により、大学と連携した中高一貫カリキュラムの評価をする。「21世紀型教養」を育む教科や授業を実施し、そのあり方を報告書にまとめる。   |
| 第3年次<br>(当該年次) | 総合的なアンケート調査を実施し併設型中高一貫校における新しい中高大連携教育（キャリア教育）のあり方について具体的に評価する。「21世紀型教養」を育むことにつながる「新教科群」（高1・2）の授業内容をまとめた『学びをつなぎ未来を拓く－高大連携による「新教科」の授業実践－』（黎明書房）を出版する。研究発表会（2006年2月10日 テーマ「青年期のキャリア形成につながる学びの力－多角的なアプローチを通して－」）による研究成果の公表と研究協議を通じて新しい教科・科目構成をはじめとするカリキュラムデザインへの提言を報告書にまとめる。  |

## 5 研究開発の成果

21世紀型学びの力として「生きる力」と「確かな学力」が求められる教育状況の中、本校は併設型中高一貫校として、総合的な学習を軸に「高大の連携」を生かした「青年期のキャリア形成」に資する教育課程の研究開発に取り組んできた。その教育実践研究の中で、青年期のキャリア形成の特質として三つの要素を明らかにしてきた。

- 1) 多くの人との出会いや多面的な学習から自分の興味・関心が何かを探る「個性的自立のキャリア」
- 2) 豊かで多面的な学習環境の中で自分の学習を跡づける「学びのキャリア」
- 3) 人や社会とのかかわりの中で、ともに学び合いながら将来の自分の生き方について考える「自覚的なキャリア」

このようなキャリア意識の形成を通して生徒一人ひとりが自分自身の将来を自覚的・自立的に「生き方」を選択していく教育実践を行ってきた。また同時に、キャリア意識の形成につながる「学びの総合力」の育成に取り組んできた。つまり、必要な知識の本質的な理解、学んだ知識を生きた知識として活用する思考力、適切かつ効果的に伝える表現力、豊かな対人・社会関係能力、深い動機付けをともなった学習意欲といった観点から生徒の学ぶ力を育んできた。

## (1)実施による効果

## ① 生徒への効果

生徒へ実施した「学力アンケート」（本校の「8つの力」）における各学年のアンケート結果をみると、「併設型中高一貫カリキュラム」における開発課題である「総合人間科」「ソーシャルライフ」「新教科群」「学びの杜（学術コース）」の授業については、平均値が高く授業の目的の達成度が高いことがわかる。キャリア形成は、中高六カ年のゆとりと豊かな学びの中でゆとりと多面的に形成されていくものであるが、その中心になるのが、総合的な学習「総合人間科」である。その総合人間科で、中学1年生から高校3年生までの六学年の生徒が、本校の「8つの力」の各項目の力がついたと答えている。

六カ年の入口にあたる中学1年生と出口にあたる高校3年生の学年テーマが「生き方」であることの意味は大きい。中学1年生の「生き方Ⅰ」についての学習は、その後の各学年の総合人間科における学習の底流として高校3年生の「生き方Ⅱ」につながっていくからである。総合人間科の学習では、自分の興味関心から出発しフィールドワークで、社会の中のさまざまな人やものと学び合う。知識・技能に加え思考力・判断力・表現力、学ぶ意欲などの主体的な学び合いや個性的自立を育てる学習経験とによって、出口にあたる高校3年生において、一人ひとりの生徒が自分自身の将来の「生き方」を自覚的に考えられる力になってゆることがわかる。

また、高校3年生が中高校時代の自分自身の六年間の学びのキャリアを振り返り、それを自分の言葉で中学1年生に語ることで得るものは大きい。一方、中学1年生にとっても親や先生より年齢の近い高校3年生から直接「生き方」についての過去・現在・未来への展望について聞く話は、身近であるだけに大変興味深いものである。

次に、中学校で入学した2クラス80名の生徒に加えて、新しく高校から入学する生徒(1クラス40名)に対応した「融合カリキュラム」の持つ意義は次の2点である。

①公立中学校から1クラス新しく入学する生徒に対して、附属中学校からの進学生が高校での学びの核になること。とくに「融合カリキュラム」の中心になる「総合人間科」の学習では、附属中学校からの進学生がリーダーとなって、お互いに教え合うことで、より自らの学びを深化させることができる。

②附属中学校からの進学生にとっては、高校から新しく入学してくる生徒達を新しい個性として受け入れることによって、そこでの人間関係や学びが広がる。そこに個性の磨き合いが行われることになる。

併設型中高一貫校としての環境をいかした「融合カリキュラム」では、一人ひとりの個性的自立に向けて、学習に取り組みながらゆっくりとキャリア形成をしてゆく。

## ② 教師への効果

i) 学年プロジェクト体制で全教員が取り組む「総合人間科」では、個々の生徒への関わりと理解が深まる。特に高校三年の「生き方」についての生徒同士の「学び合い」の姿が評価されている。「総合人間科」はキャリア形成の中心として他に代替できるものがないからである。

ii) 指導方法等の改善は、教科をはじめ「新教科」などにおいてさまざまに試みられている。教師の意欲的な実践を生み出しプロジェクトとして新しい授業に臨んでいる。

iii) 「新教科群」において実践と評価をもとに研究を重ねて「21世紀型教養」を育むことにつながる「新教科群」(高1・2)の授業内容をまとめた『学びをつなぎ未来を拓く－高大連携による「新教科」の授業実践－』(黎明書房)を2006年2月に出版した。教師の教育実践への意欲・自信・満足感を高める。他に「併設型中高一貫カリキュラム」(1-2-2-1制)における中高一貫教育を紹介した『新しい中等教育へのメッセージ－ともに学びをつくる－』(黎明書房2003年8月)がある。

iv) 教員間の連携・協力は教員が連携して取り組む

「総合人間科」や「ソーシャルライフ」や「新教科群」の学習、またはT.Tの「(基礎)英語」「(基礎)数学」「国語総合(古典)」「理科総合(生・化)」などで日常的に行われている。研究開発と教育実践との相乗効果がうまれる。

## ③ 保護者等への効果

保護者のキャリア教育や中高一貫教育や学力問題などへの関心は高い。毎年第2回P.T.A.研修会(平成17年11月26日(土))では、P.T.A.主催によるP.T.A.シンポジウム「今、附属の教育を考える」(中高 約180名参加)が開催され、参加者は増えてきている。3つの分科会に分かれてP.T.A.会員同士による活発な話し合いが持たれる。本校の教育やカリキュラムについての理解を共有したり、保護者の気持ちを聞きあったりして、今後の学校教育への支援体制の基礎を築く機会となる。

## (2)実施上の問題点と今後の課題

### ① 「21世紀型教養」を育むことにつながる新教科群(4科目)の発展的取り組み

文理融合の「21世紀型教養」を育むことにつながる「新教科群」(4科目)の授業実践については、授業内容や理念をまとめた『学びをつなぎ未来を拓く－高大連携による「新教科」の授業実践－』(黎明書房)を出版した。高校1年生と2年生におけるこれらの授業の実践研究の成果をふまえて、さまざまな学習内容や方法についての評価に取り組み、その一般化に向けてテキスト作りに今後も継続して取り組む。

### ② 「学びの総合力」(8つの力)による「協同的探究学習モデル」研究

「併設型中高一貫カリキュラム」で開発した、文理融合の「21世紀型教養」を育む新教科でつく力についての評価研究のために、「理解力・思考力・表現力を育む協同的探究学習モデル」を構造化した。この構図は研究開発で取り組んだ多様な教育プログラムの教育実践において有効と考えられる学習方法を整理しモデル化する目的を持つ。学力アンケートなどにより今後も「協同的探究学習モデル」の検証・応用に取り組み「併設型中高一貫カリキュラム」の評価を継続する。

### ③ 新しい授業の開発と教科の授業との相乗効果による授業改善

「併設型中高一貫カリキュラム」(1-2-2-1制)で新しく開発した「ソーシャルライフ」「新教科群」などの実践研究が行われることにより、教師同士の新しい授業への積極的な取り組みや生徒による主体的な授業参加を生み出してきた。それらは新しく創設された授業の中で大きな成果を生み出している。しかし、これらは徐々に既存の教科領域に及んでいくものである。今後は、新しい授業の研究開発と既存の教科の授

業との相乗効果による授業改善への取り組みが継続して行われることで、カリキュラム全体でのバランスのとれた授業改善の取り組みとすることが課題となる。

#### ④ 「学びの杜（学術コース）」と新教科群の融合による「キャリア教育プログラム」の開発

高校1～3年生の希望者が、大学の最先端の研究内容を専門的に学ぶ「学びの杜（学術コース）」連続講座を土曜日や夏休みに4講座（法・理・教育・心理学）開講し単位化した。総合大学の各研究科との連携による高校生のための「キャリア教育プログラム」開発の一貫である。受講した高校生は直接大学教員から専門的な内容を学ぶことで、知的刺激を受け自らの適性を知ることができる。「学びの杜（学術コース）」の講座内容と新教科群（高校1・2年生）の学習内容とを関連・融合することで文理融合の「21世紀型教養」を育む。またより効果的な一人ひとりのキャリア形成に資する学びの力を育成するための新教科と学びの杜を融合するシラバス研究が今後の課題である。

#### ⑤ 大学と協働で取り組む文理融合の「新しい教育課程（カリキュラム）づくり」

少子高齢化が進む成熟社会における中等教育の課題は多い。高等教育への接続などの諸問題の改善のために必要なのは、21世紀を創る勇気ある知識人を育てる中等教育から高等教育へのカリキュラムデザインの検討である。本校では、総合的な学習（総合人間科）やキャリア形成を中心に、中等教育の理念と課題について実践的な研究を重ねてきた。その成果は「併設型中高一貫カリキュラム」（1-2-2-1制）の実践研究として、新しく開発した「ソーシャルライフ」・「新教科群」の授業や連続講座「学びの杜（学術コース）」の単位化などである。それらの知的好奇心と創造的・个性的自立を育む実践研究をふまえ、同一キャンパスにある総合大学の教員と協働で、21世紀を創る勇気ある知識人が育つための文理融合の「新しい教育課程（カリキュラム）づくり」に継続して取り組むことが今後の課題である。

## 7. 研究開発の経過

### (1) 研究協議会と出版物

- 2003年8月 『新しい中等教育へのメッセージとともに学びをつくる-』（黎明書房）
- 2004年2月13日 中等教育研究協議会  
テーマ「ともに学びを創る-中高のキャリア意識の形成と自立的な学びを育てるカリキュラムの開発」
- 2004年2月14日 第3回中高一貫教育研究会  
テーマ「中高一貫教育を考える」
- 2005年2月 21世紀型授業づくり99  
『学校教育で育む「豊かな人間関係と社

会性」-心理学を活用した新しい授業例Part2-』（明治図書）

2006年2月 『学びをつなぎ未来を拓く-高大連携による「新教科」の授業実践-』（黎明書房）

2006年2月10日 中等教育研究協議会  
テーマ「青年期のキャリア形成につながる学びの力-多角的なアプローチを通して-」

### (2) 17年度の経過

#### 4月14日（木） 第1回 研究会議

- 1) 今年度の研究会議（校内グループ別研究会を含む）の方針
- 2) 研究委員会の目標
- 3) 校内研究体制の決定
- 4) 今年度の研究会議の目標
  1. 教育研究と教育実践の統合（相乗効果）を通して、学習・生活にかかわる学校改善
  2. 校内研究グループ目標の明確化と相互連携
  3. 中長期委員会→研究委員会→研究会議の流れを作り、研究会議での重要案件の討議
  4. 学部担当者との連絡、連携の強化
  5. 研究協議会の準備

#### 5月12日（木） 第2回 研究会議

研究グループ別会合 校内研究体制表 5グループ制

|   | 研究グループ      | 人数 | 校長・運委 | 学部担当 | 研究部（関連） |
|---|-------------|----|-------|------|---------|
| A | ソーシャル       | 7人 | 吉田    | 平石   | 鈴木克     |
| B | 新教科         | 8人 |       | 加藤   | 石川      |
| C | 総人・キャリア     | 7人 |       | 植田   | 佐藤俊     |
| D | 中高一貫教育課程と学力 | 7人 | 丸山、矢木 | 藤村   | 今村      |
| E | 大学連携        | 9人 | 福谷、藤田 | 高田   | 斉藤      |

- 1) 研究協議会（授業・分科会）の方向性の確認
- 2) 研究協議会に向けての「ゆるやかな」方向性
- 3) 2005年 研究協議会テーマの検討

#### 6月2日（木） 第3回 研究会議

- 1) 附属学力モデルについて
- 2) 研究協議会のテーマについて



- 3) 研究協議会の講演者候補
- 4) 2005年 研究協議会テーマの決定
- 5) 名大附属版「学びの力構造図」の説明と調査の方法
- 6) 研究協議会公開授業と分科会等の日程と方向性

**6月24日(金) 文部科学省研究開発学校 第1回運営指導委員会**

- 1) 短時間の授業見学(予定)
- 2) 平成17年度(継続3年次)研究開発実施計画について
- 3) 中等教育研究協議会について

**6月30日(木) 第4回 研究会議**

- 1) 研究グループ別会合のフィードバック
- 2) 研究開発運営指導委員会の報告
- 3) 中等教育研究協議会の講演者
- 4) 今年度紀要計画
- 5) 研究協議会仕事担当者決定

**8月31日(水) 校内研究会**

- 1) 各研究グループより中間報告会
  1. これまでの取り組み
  2. 研究協議会の持ち方
  3. 今後の方向性
  4. 各教科の公開授業に向けての方向性
- 2) 全体研修会 講演テーマ  
「理解を深め、思考力を育てる：新しい学力モデルと授業の進め方」  
研究会講師：名古屋大学教育学部 藤村宣之  
講演の内容としては、学習心理学や認知心理学といった専門的観点からの最近の国際比較調査(PISA, TIMSSなど)や国内の教育課程実施状況調査の分析、小学校を中心に進めてきた実践研究の成果の紹介、新しい学力モデルとその学力を形成するための授業過程の提案等

**9月29日(木) 第5回 研究会議**

全体会：

- 1) 運営指導委員会・研究開発実地調査報告
- 2) 附属学校をフィールドとした調査研究の基本方針について
- 3) 名古屋大学内附属学校オープンクラスについて
- 4) 学びの杜・学術コース予定(別紙参照)
- 5) 研究関連議題
  1. 生徒用アンケート項目の提示と実施方法
  2. 次期研究開発応募の内容
  3. 研究協議会募集要項

分科会：

- 1) 研究グループ別
- 2) 研究協議会新旧係別長会議

**10月13日(木) 第6回 研究会議**

全体会：

- 1) 研究関連報告
  1. 名古屋大学内 附属学校オープンキャンパスについて
  2. 後期の研究会議予定
  3. 生徒用アンケート項目の実施
  4. 研究協議会募集要項
  5. 文科省研究開発応募の内容
  6. 研究協議会参加報告(佐賀大学附属中学校)
  7. P T A研修会

分科会：

- 1) 研究協議会第一回係別会議
- 2) 研究グループ別会議

**10月20日(木) 第7回 研究会議**

- 1) 名古屋大学内 附属学校オープンクラスについて
- 2) 生徒用アンケート項目の実施方法
- 3) 研究協議会募集要項
- 4) 授業アンケートの取り組みについて

**10月24日(月) 文部科学省研究開発学校 第2回運営指導委員会**

- 1) 授業見学(高校新教科「自然と科学」)
- 2) 中等教育研究協議会について(授業・分科会への助言)

**11月17日(木) 第8回 研究会議**

- 1) 研究開発実地調査について
- 2) 研究協議会に向けての準備について
- 3) 授業アンケートの取り組みについて
- 4) 来年度の教育課程について

**11月25日(金) 文部科学省研究開発学校 実地調査**

- 1) 研究開発学校継続3年目の概要説明
- 2) 学校設定教科「新教科」について
- 3) 研究開発全般について討議
- 4) 研究開発総括に向けての指導・助言

**12月1日(木) 第9回 研究会議**

- 1) 研究協議会用授業・分科会の冊子作成について
- 2) 研究開発事業報告書執筆の確認
- 3) 研究協議会案内について
- 4) 研究開発実地調査(11月25日(金))の報告
- 5) S S H関連会議の報告

**12月8日(木) 第10回 研究会議**

ターセッション

全体研修会 講演テーマ

「中等教育研究協議会にむけて：キャリア形成と学力」

研究会議講師：中部大学人文学部心理学科 梶田正巳先生

**1月12日(木) 第11回 研究会議**

全体会：

- 1) SSH関連の報告
- 2) 研究開発学校研究協議会の発表会
- 3) 本校研究協議会に向けて
- 4) 他校研究会参加について

分科会：

- 1) 研究協議会に向けての準備
- 2) 研究協議会係別仕事の確認

**2月10日(金) 中等教育研究協議会**

文部科学省研究開発学校 第3回運営指導委員会

- 1) 研究主題 青年期のキャリア形成につながる学びの力 ー多角的なアプローチを通してー

- 2) 内容

午前：公開授業

中学1年 総合的学習を活用した「キャリア教育」の取り組み(高校3年生と合同)  
教科の授業(社会)

中学2年 ソーシャルライフ(ソーシャルスキルの授業)  
教科の授業(基礎英語)

中学3年 ソーシャルライフ(ソーシャルスキルの授業)  
科の授業(基礎数学)

高校1年 新教科(自然と科学)  
教科の授業(国語・理科総合)

高校2年 新教科(共生と平和の科学)

午後：分科会

- A 併設型中高一貫カリキュラム評価と学力
- B 新教科の実践から考える教科の学び
- C 教室で学ぶ人間関係構築スキル
- D 総合的学習から考えるキャリア形成
- E 大学連携講座の取り組みと学びの力

全体会講演：「21世紀型の学力とキャリア形成」

梶田 正巳先生(中部大学人文学部心理学科)

**2月14日(火) 研究開発学校研究協議会 発表会**

- 1) 丸の内東京會館
- 2) 実施報告書と自己評価書に基づき研究発表、ポス

**2月16日(木) 第12回 研究会議**

- 1) 研究協議会の反省会の持ち方
- 2) 研究協議会係別・分科会別反省会

**3月2日(木) 第13回 研究会議**

- 1) 東大・奈良女研究会の報告(本校に参考になる点を特に重点的に)
- 2) 学びの杜の来年度の予定
- 3) 東海附連について
- 4) 研究協議会分科会別の振り返りの報告と協議(研究開発の総括)
- 5) 来年度の校内研究体制